

別府溝部学園短期大学自己点検・評価について

—平成17年度前期—

田邊 勲

The Report of the 2005 Self - Study and Evaluation at Beppu Mizobe Gakuen College

Isao Tanabe

1. はじめに

実施までの経過

平成5年1月 自己点検・評価項目の決定(17項目)

委員会発足・自己点検・評価
委員会規定の策定

平成11年10月 点検・評価内容の検討

(1) 授業評価〈教員の自己評価・学生の評価〉

(2) シラバスの作成とその相互評価

(3) 就職関係

(4) 学生募集

点検・評価内容の決定

授業評価〈教員の自己評価・

学生の評価〉

授業評価の実施

1年目の自己点検・評価は平成12年度前期授業について実施した。調査項目の設定や調査の方法・結果の発表等について一部に不安を感じる職員もいたが、結果的に教員や学生にその意義は十分に理解されたと考える。

[調査結果及び分析は、本学紀要第21号('01)に掲載]

さらに2年目以降も1年目とほぼ同様な調査を行った結果、1年目の調査で学生から非常に厳しい評価のついた授業が2年目の調査では肯定的な評価の高い結果が出るなど、自己点検・評価の趣

旨は十分に生かされていると判断される。

[平成12年度後期、平成13年度前期の自己点検・評価の結果及び分析は、本学紀要第22号('02)に掲載]

平成14年度については、別府溝部学園短期大学への校名変更に伴って、別府女子短期大学という校名では最後の自己点検・評価を総括するものとして「平成14年度別府女子短期大学 自己点検・評価報告書」を作成した。内容的には、「Ⅰ 本学の概要」「Ⅱ 教育活動」「Ⅲ 特色ある活動と地域とのかかわり」とし、従来の「学生による授業評価」は「Ⅱ 教育活動」の中の一項目として結果及び分析を記載した。

今年度は、従来どおり「学生による授業評価」の結果及び分析の概要を紀要に掲載し、報告することとした。

2. 調査内容及び手続き

平成17年度前期授業評価は、服飾デザイン学科50講座(1年)と28講座(2年)、食物学科54講座(1年)と44講座(2年)、幼児教育学科28講座(1年)と22講座(2年)、介護福祉学科16講座(1年)と14講座(2年)について、全ての学生と全職員(常勤、非常勤を含めて90名)を対象にして、平成17年7月11日から4日間にわたり実施した。

それぞれの調査内容は表1・2に示す11項目(A~K)であり、マークシート方式による調査を行った。なお、今回は一部記述式の回答も取り入れた。

表1：学生に対する点検項目

A	いつも集中して取り組めた
B	私語をつつしんだ
C	遅刻・欠席がないよう心がけた
D	意欲的に取り組んだ
E	この授業はわかりやすかった
F	学習内容に興味や関心が持てた
G	学習内容の分量は適切だった
H	教員の声の大きさは適切だった
I	教員の教え方に工夫が感じられた
J	教員は熱心に教えていた
K	授業中どの学生にも公平に接していた

表2：教員に対する点検項目

A	学生は授業を理解した
B	授業の事前準備は、十分おこなった
C	声の大きさ、話し方に留意した
D	学生の興味・関心を喚起するよう心がけた
E	各種教材（視聴覚機器・教科書等）を有効に活用した
F	授業の開始・終了時刻を守った
G	授業中どの学生にも公平に接した
H	出欠確認を適切におこなった
I	授業目的を達成した
J	授業要項（シラバス）の記載内容は現状で良い
K	学生のことが理解できた

学生、教員ともそれぞれの点検項目について、1. 強くそう思う 2. そう思う 3. どちらとも言えない 4. そう思わない 5. まったくそう思わないの5段階の中から、1つを選びマークにより回答してもらった。

3. 相互評価

平成12年度以降、長崎県の玉木女子短期大学、奈良県の桜井女子短期大学（現 畿央大学短期大学部）両大学と相互評価を行っている。

玉木女子短期大学 1・2年全学生と全教員による授業評価を実施している。調査項目は a. 出席状況や受講態度の評価 b. 授業に関する評価 c. 総合評価 で、その三項目に関して、学生には11項目・教員には14項目について5段階で回答させるとともに、記述式も併用している。

桜井女子短期大学 教育目標とカリキュラムの編成、教育指導の工夫・改善、学生への支援、生涯学習への対応など、幅広い教育活動に関するアンケート調査を実施している。

今年度も、3月の下旬に下記の四項目に重点を置いて相互評価協議会を実施する予定にしている。

(1) 授業法の点検と評価 (2) 教育課程の点検と評

価 (3) 学生募集の点検と評価 (4) 第三者評価について

4. 平成17年度前期授業評価

服飾デザイン学科

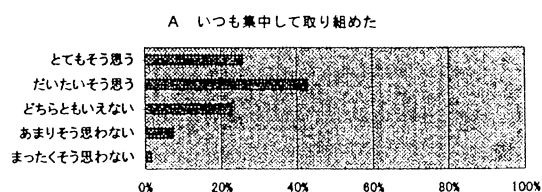
a ファッション造形コース（2年）

11の調査項目のうち、肯定的な判断にあたる「①とてもそう思う」、「②だいたいそう思う」の合計値が80%を超えているのは4項目で、「C 遅刻・欠席がないよう心がけた（81%）」「H 教員の声の大きさは適切だった（85%）」「J 教員は熱心に教えていた（83%）」「K 授業中どの学生にも公平に接していた（83%）」となっている。そのうち学生の授業への取り組みで、最高値を示した項目はCの遅刻、欠席がないよう心がけたであり、本学の学生の授業への積極的な取り組みの姿勢の現れと受け取れる。また、授業について見てみると教員は声の大きさは適切で、熱意を持ち学生に対して公平に接していると評価している。

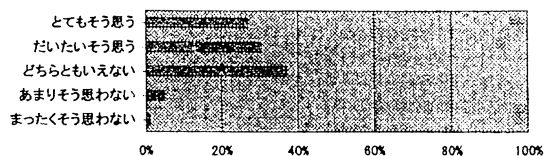
しかし、一方で、否定的な判断にあたる「④あまりそう思わない」、「⑤まったくそう思わない」の合計値が高かった項目（④⑤合計で10%以上）は「F 学習内容に興味や関心が持てた（19%）」と「E この授業はわかりやすかった（17%）」「G 学習内容の分量は適切だった（16%）」「I 教員の教え方に工夫が感じられた（10%）」であった。

総合的に学生の評価を分析してみると、遅刻、欠席をしないよう積極的に授業に取り組む姿勢はあるものの、授業に集中する面にやや欠け、つい私語をする点がかがえる。教員側の反省項目としては、「教え方を工夫する」ことによって「わかりやすい」授業を行い、「興味や関心」を持たせるように心がけるとともに、授業内容の「分量」を検討することが求められている。

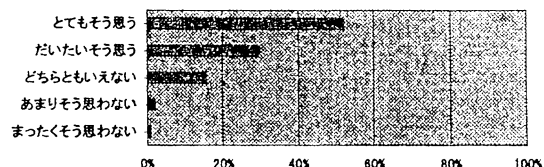
表1



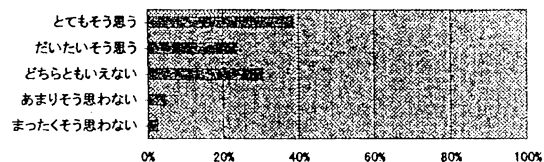
B 私語をつしんだ



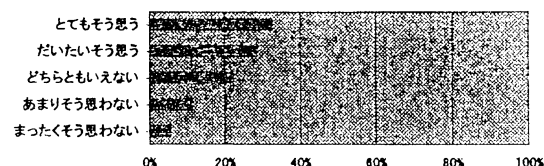
C 遅刻、欠席がないよう心がけた



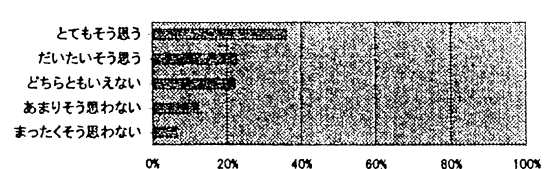
D 意欲的に取り組んだ



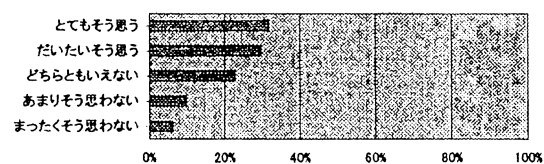
E この授業はわかりやすかった



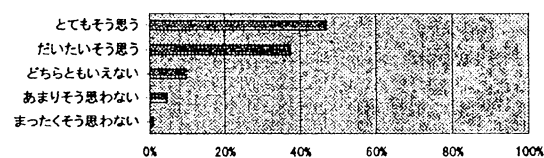
F 学習内容に興味や関心が持てた



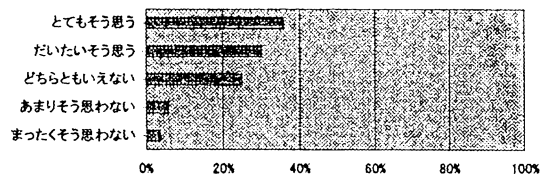
G 学習内容の分量は適切だった



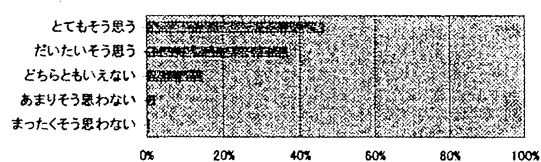
H 教員の声の大きさは適切だった



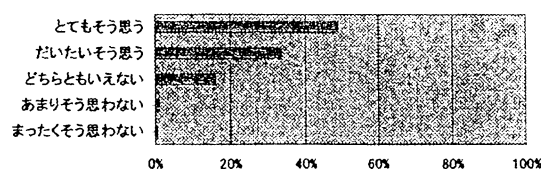
I 教員の教え方に工夫が感じられた



J 教員は熱心に教えていた



K 授業中どの学生にも公平に接していた

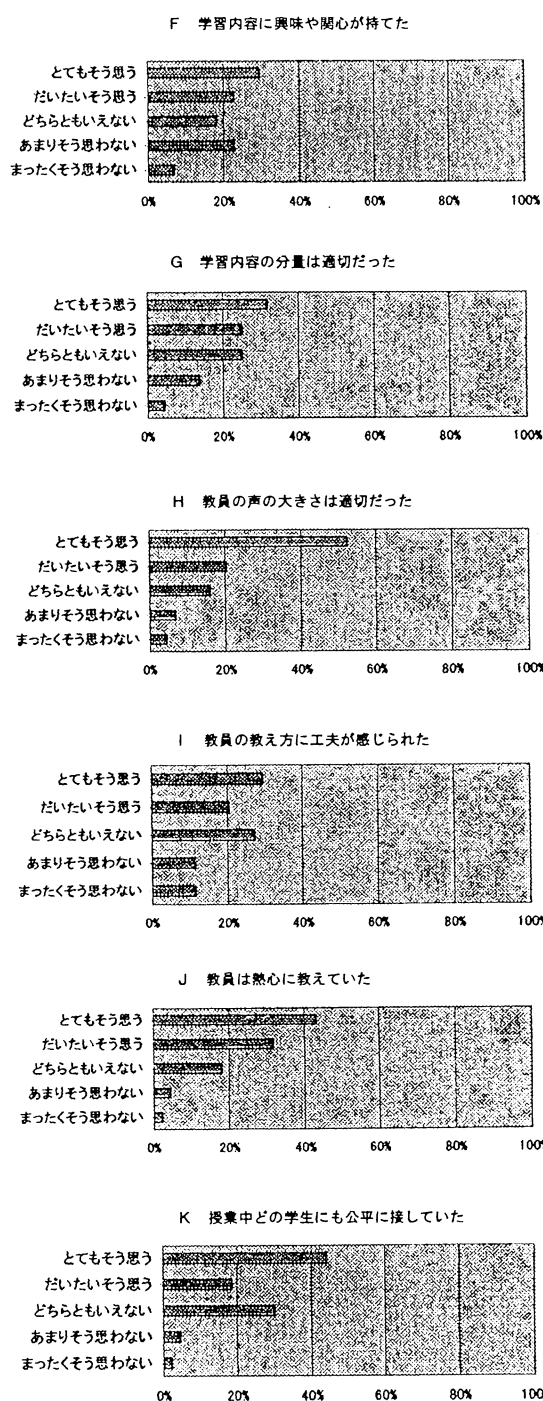
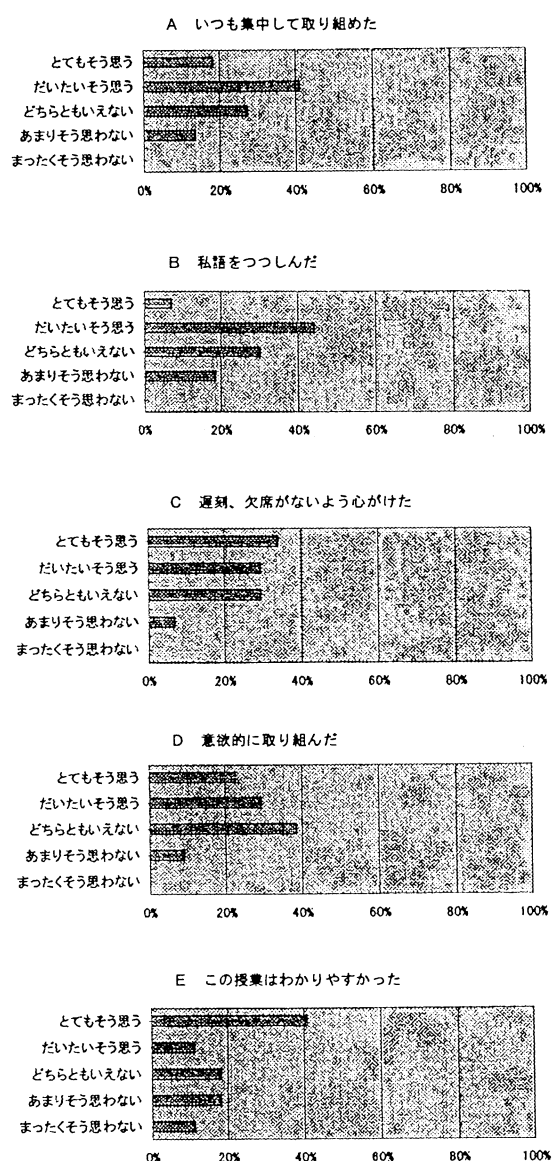


b ファッション造形コース（1年）

11の調査項目のうち、肯定的な判断にあたる「①とてもそう思う」、「②だいたいそう思う」の合計値が60%を超えているのは「J 教員は熱心に教えていた（75%）」「H 教員の声の大きさは適切だった（72%）」「C 遅刻・欠席がないよう心がけた（64%）」「K 授業中どの学生にも公平に接していた（63%）」となっている。2年生に比べると全体的に低い数値になっており、残りの7項目はすべて50%台になっている。しかし、一方で「①とてもそう思う」だけを見ると、「H 教員の声の大きさは適切だった（52%）」「K 授業中どの学生にも公平に接していた（44%）」「J 教員は熱心に教えていた（43%）」「E この授業はわかりやすかった（41%）」という結果になっている。しかし、同時にまた、否定的な判断にあたる「④あまりそう思わない」、「⑤まったくそう思わない」の合計値が「E この授業はわかりやすかった」に関しては（29%）あり、相反する評価がなされていることがうかがえる。否定的な判断のポイントが高い項目はその他に「F 学習内容に興味や関心が持てた（30%）」「I 教員の教え方に工夫が感じられた（22%）」などであった。総合的に学生の評価を分析してみると、遅刻、欠席をしないよう積極的に授業に取り組む姿勢はあ

るものの、授業に集中する面にやや欠け、つい私語をする点がうかがえるのは2年生と同じような傾向を示しているが、より低い評価になっている。教員側の反省項目としては、学生は積極的に授業に臨む姿勢を持っているので、「教え方を工夫」することで「わかりやすい」授業を心がけ「興味・関心」を持たせることで、「私語」をさせず、授業に「集中して取り組む」ことが求められる。このコースは毎年同じような傾向であるので今後の推移を見守っていききたい。

表2



c グラフィックデザインコース（2年）

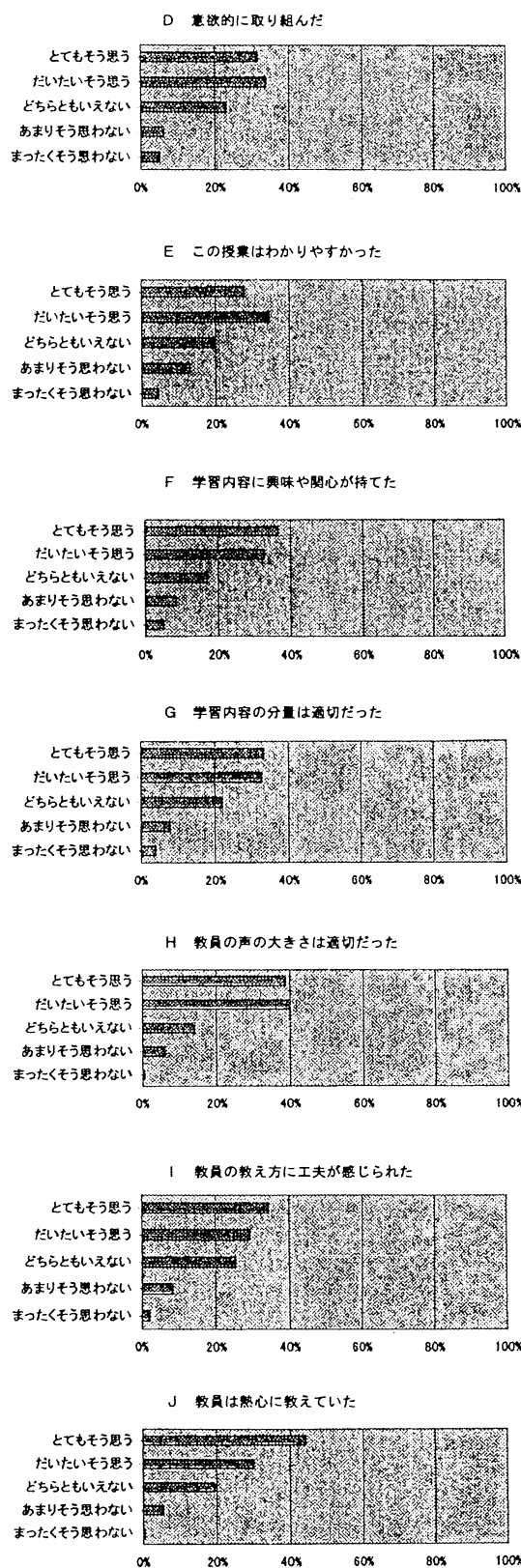
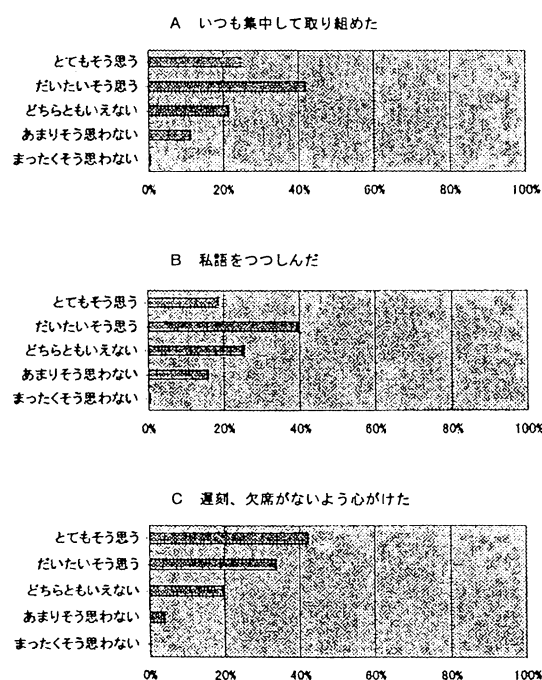
11の調査項目のうち、肯定的な判断にあたる「①とてもそう思う」、「②だいたいそう思う」の合計値は、「B 私語をつつしんだ」（59%）を除いて全て60%を超えていてその平均は69%となっており、ほぼ7割の学生が満足している結果が出ている。その中で70%を超えている項目は「H 教員の声の大きさは適切だった（79%）」「K 授業

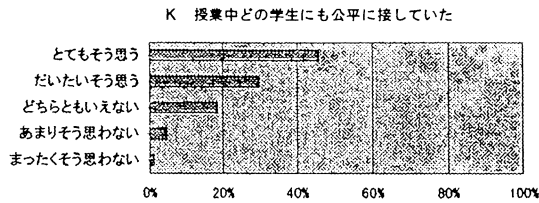
中どの学生にも公平に接していた (76%)」「C 遅刻・欠席がないよう心がけた (76%)」「J 教員は熱心に教えていた (74%)」「F 学習内容に興味や関心が持てた (70%)」となっている。学生は授業に積極的に参加するものの「D 意欲的に取り組んだ」の項目の評価が①と②をあわせても66%であることは、今後の課題として残る。

一方、否定的な判断にあたる「④あまりそう思わない」、「⑤まったくそう思わない」の合計値は最高で18%となっており、その項目は「E この授業はわかりやすかった」であり、それに次ぐのが17%の「B 私語をつつしんだ」となっている。学生・教師ともに反省材料と考えられる。特に「E」の項目に関しては肯定的な回答もありながら否定的回答も多いと言うことは授業のあり方を検討する必要があるのではなかろうか。

総合的に学生の評価を分析してみると、遅刻、欠席をしないよう積極的に授業に取り組む姿勢はあるものの、授業に集中する面にやや欠け、つい私語をする点がうかがえる。教員側の反省項目としては、「教え方を工夫する」ことによって「わかりやすい」授業を行い、「興味や関心」を持たせるように心がけることが求められている。

表3





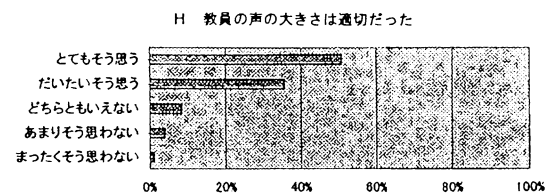
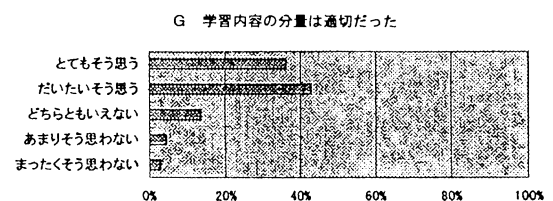
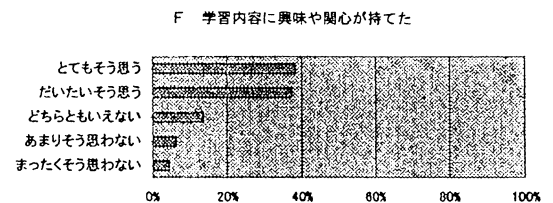
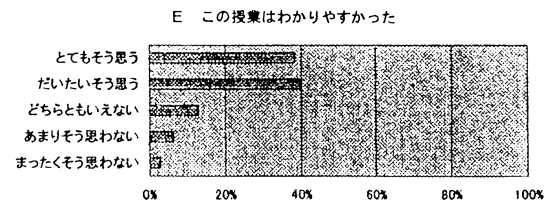
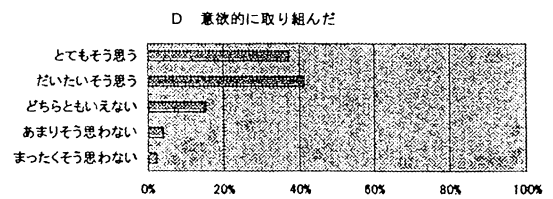
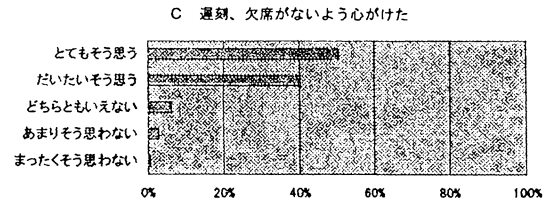
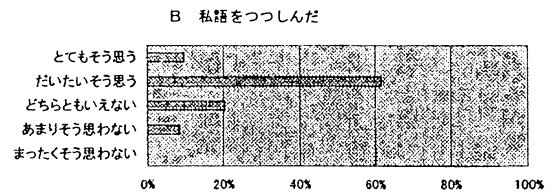
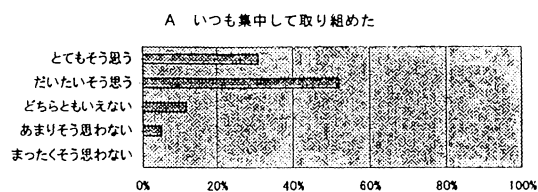
d グラフィックデザインコース（1年）

11の調査項目のうち、肯定的な判断にあたる「①とてもそう思う」、「②だいたいそう思う」の合計値は全て70%を超えて高い数値を示している。その平均は82%となっている。そのうち、「①とてもそう思う」という回答だけでみると、平均は39%であるが、最高値を示した項目は「J 教員は熱心に教えていた」で56%であった。2年生も44%であったが、それに比べてみても12ポイントも上回り、大学の授業に新鮮な気持ちで取り組む学生の姿勢に応える教員の熱意の現れと受け取れる。また、①と②を合わせて最も高い評価であったのは同じく「J」の項目で92%を示した。それに次ぐ項目は「C 遅刻、欠席がないよう心がけた」で90%であった。次に高い評価であったのは、学生の姿勢としては「A いつも集中して取り組めた（83%）」、教員にかかわる項目としては「H 教員の声の大きさは適切だった（86%）」「K 授業中どの学生にも公平に接していた（85%）」「I 教員の教え方に工夫が感じられた（83%）」であった。

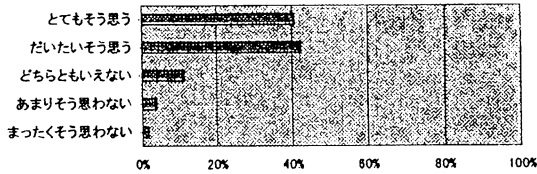
しかし、一方で「K」の項目に対しては11%の否定的な回答もあった。同じく11%の否定的意見として「F 学習内容に興味や関心が持てた」が挙げられており、教員の課題として取り組む必要がある。

また、「③どちらともいえない」の割合は平均すると20%を切っていることは、この調査の結果の信頼性を高めるもので評価されてよい。

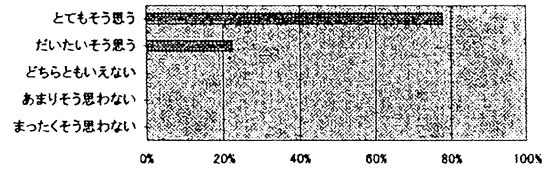
表4



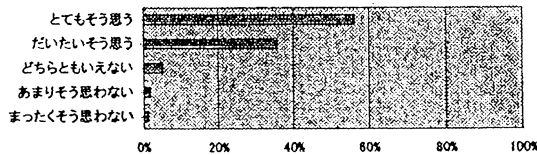
I 教員の教え方に工夫が感じられた



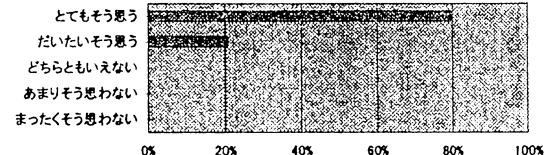
C 遅刻、欠席がないよう心がけた



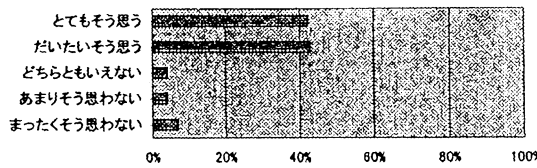
J 教員は熱心に教えていた



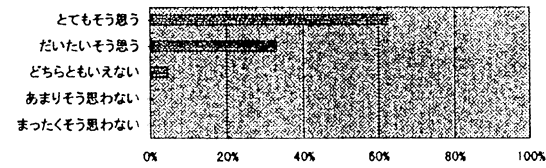
D 意欲的に取り組んだ



K 授業中どの学生にも公平に接していた



E この授業はわかりやすかった



e 留学生コース（2年）

本年度は在籍者なし

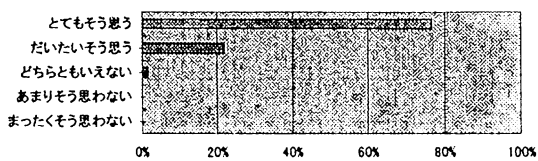
f 留学生コース（1年）

11の調査項目のうち、肯定的な判断にあたる「①とてもそう思う」、「②だいたいそう思う」の合計値は全て90%を超えていてその平均は99%となっている。また、残りの1%は「③どちらともいえない」であり、否定的回答は0%であった。

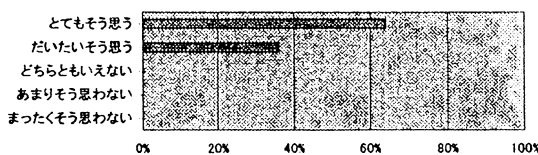
日本留学を果たし、向学心に燃えて授業に取り組もうとする学生とそれに応えようとする教員の意気込みがうまくかみ合っていると思われる。

表6

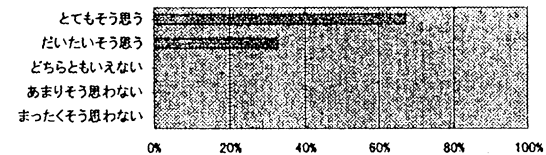
A いつも集中して取り組めた



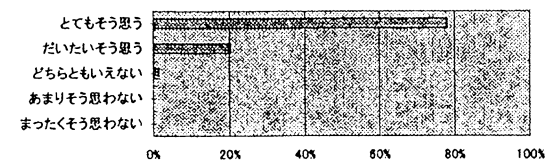
B 私語をつつしんだ



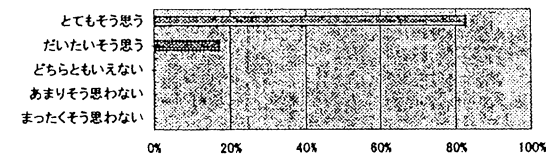
F 学習内容に興味や関心が持てた



G 学習内容の分量は適切だった



H 教員の声の大きさは適切だった



I 教員の教え方に工夫が感じられた

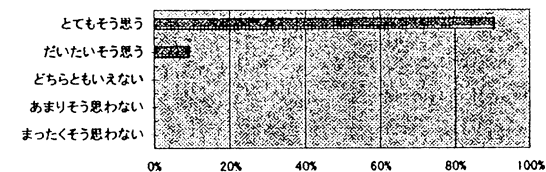
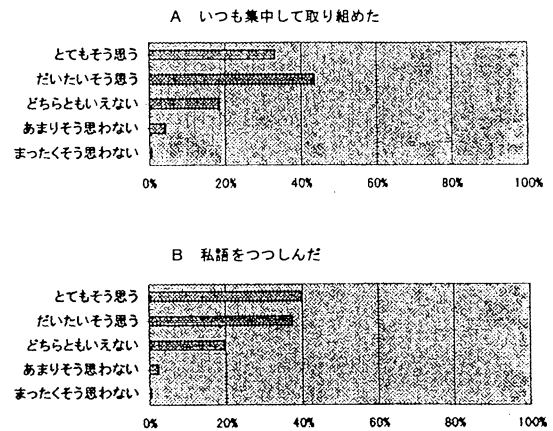
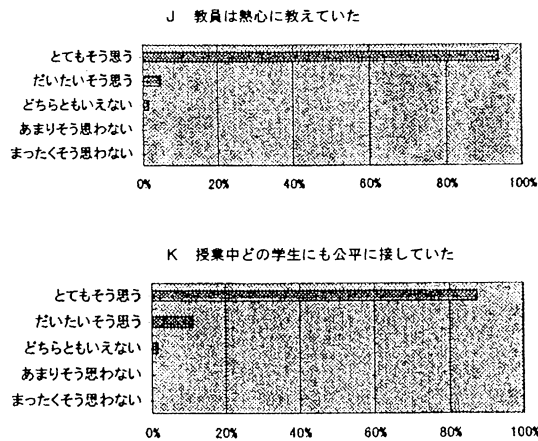


表7



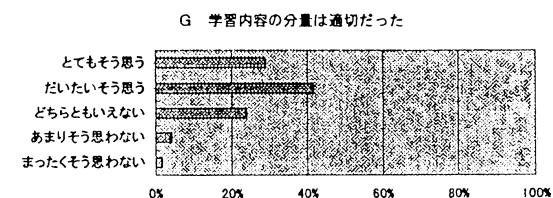
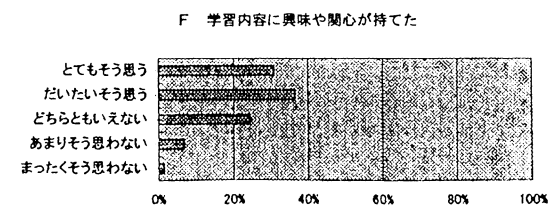
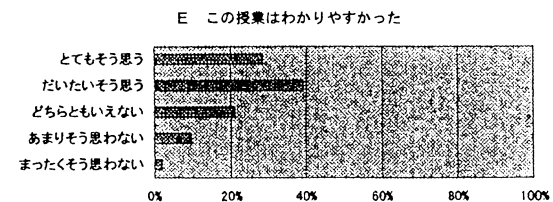
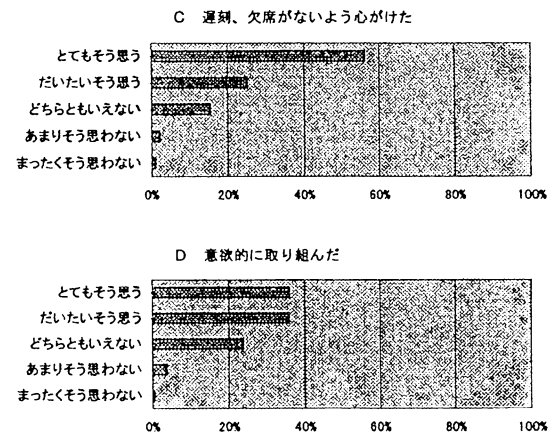
食物学科

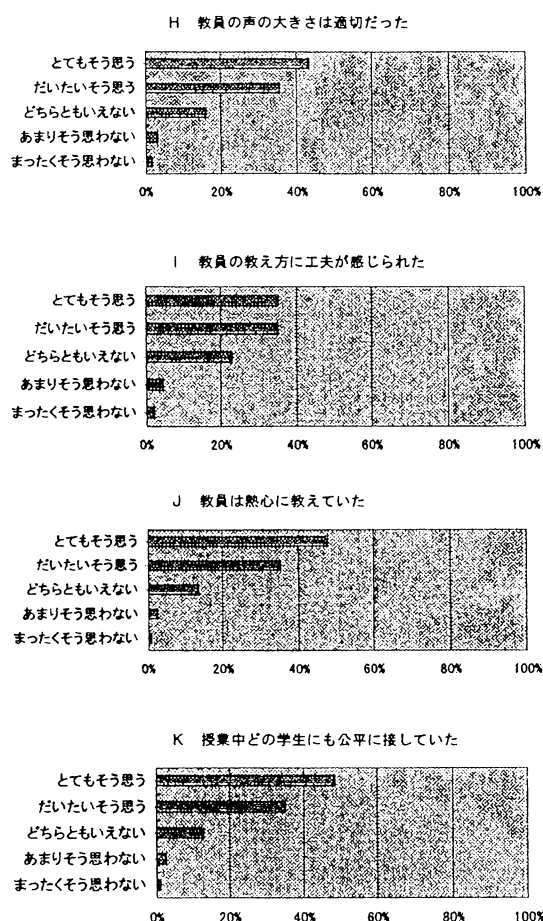
a 栄養士コース（2年）

11の調査項目のうち、肯定的な判断にあたる「①とてもそう思う」、「②だいたいそう思う」の合計値は「E この授業はわかりやすかった（67%）」「F 学習内容に興味や関心が持てた（68%）」の2項目を除いて70%を超えていてその平均は75%となっている。①と②を合わせて最も高い評価であったのは「J 教員は熱心に教えていた」と「K 授業中どの学生にも公平に接していた」で、ともに83%であった。それに次ぐ項目は「C 遅刻・欠席がないよう心がけた」の81%である。学生の積極的な姿勢と教員の熱意とが、充実した学習を生み出す雰囲気を作っているといえる。しかし前述のように「E」「F」の項目の評価が低いのは、今後の課題として残る。この「E」「F」の項目は否定的な判断にあたる「④あまりそう思わない」、「⑤まったくそう思わない」の合計値も「E」は11%、「F」も8%で、他の項目に比べて不満度の高い数値になっている。実習も多いコースではあるが、できる限り「興味・関心」のもてる授業を工夫し「わかりやすい」授業を心がけねばならない。

このコースの特徴として「B 私語をつつしんだ」の項目に対して否定的な回答が少なく（2%）、私語も少なく授業に集中して取り組む学生の姿勢がうかがわれる。

また、こういう調査では「③どちらともいえない」の割合が多くなりがちであるが、平均すると20%を切っていて、しかも肯定的な①、②の判断に大きく偏っていることは評価されてよい。





b 栄養士コース（1年）

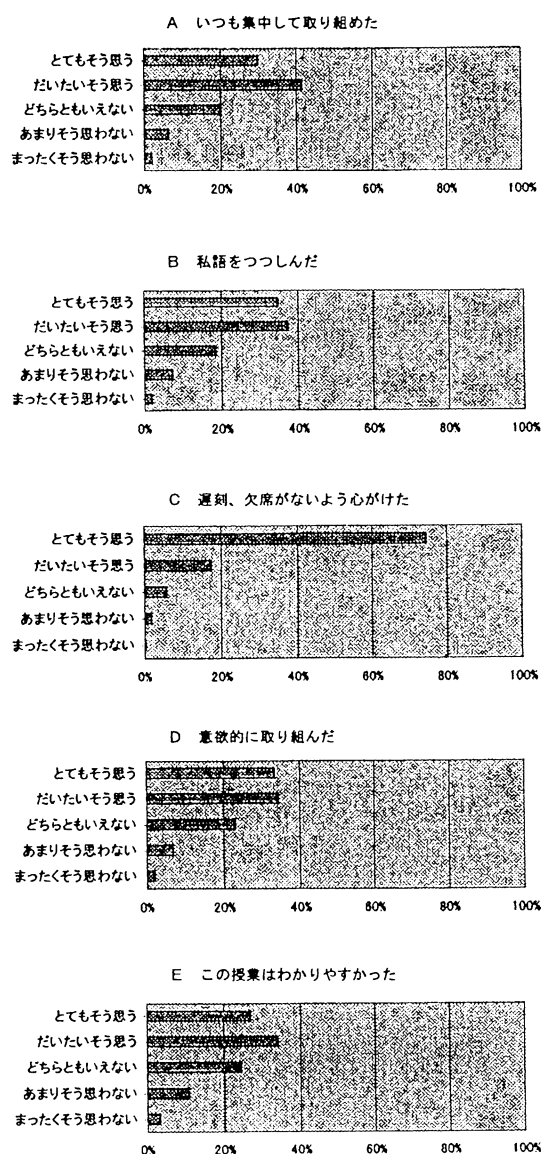
11の調査項目のうち、肯定的な判断にあたる「①とても思う」、「②だいたい思う」の合計値は全て60%を超えていてその平均は72%となっている。そのうち、「①とても思う」という回答だけでみると、平均は38%であるが、最高値を示した項目は「C 遅刻、欠席がないよう心がけた」で75%であった。2年生も最高値を示したが、それに比べてみても19ポイントも上回り、さらにこの項目に関しては否定的な回答はわずか2%、「③どちらともいえない」を含めても8%ということで、新鮮な気持ちで大学の授業に取り組む姿勢の現れと受け取れる。また、①と②を合わせて最も高い評価であったのは同じく「C」であったが、次に高い評価であったのは、学生の姿勢としては「A いつも集中して取り組めた」、「B 私語をつつしんだ」の各72%で、教員にかかわる項目では「H 教員の声の大きさは適切だった」が81%であった。

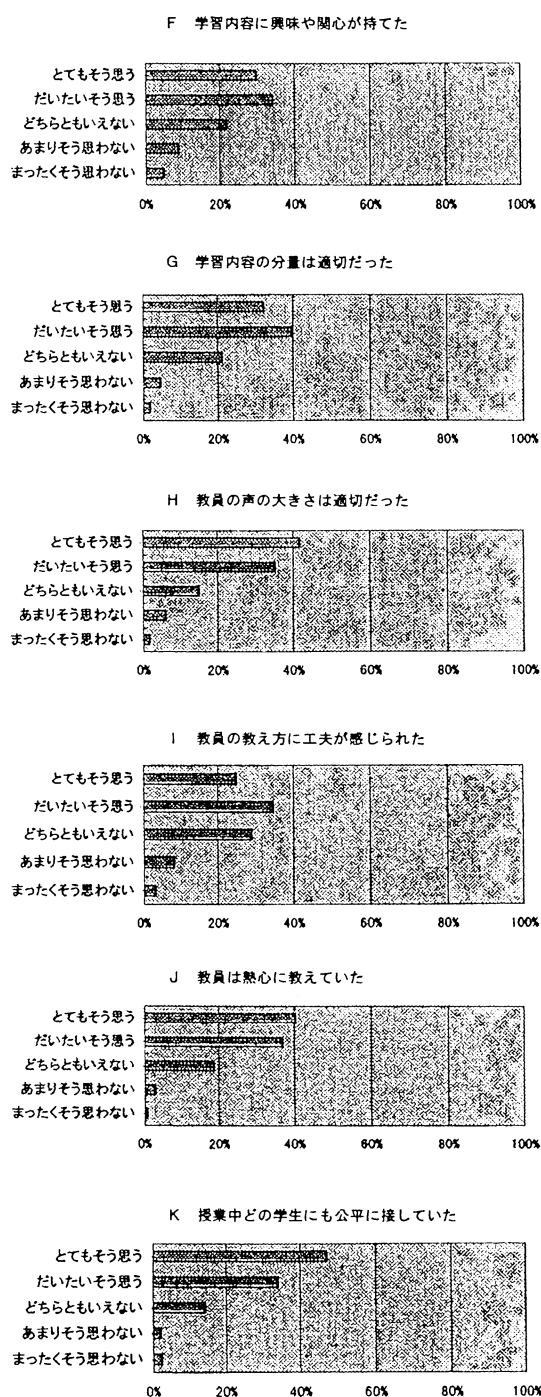
一方で、「①とても思う」の回答で「E

この授業はわかりやすかった」、「F 学習内容に興味や関心が持てた」の各項目についてはその評価は30%以下であり、教員の課題として取り組む必要があろう。また、「A いつも集中して取り組めた」（30%）は学生の課題として残る。

一方、否定的な判断にあたる「④あまりそう思わない」、「⑤まったくそう思わない」の合計値は最高で14%となっている。その項目は「E この授業はわかりやすかった」であり、教師の反省材料と考えられる。

表8





c 情報福祉コース（2年）

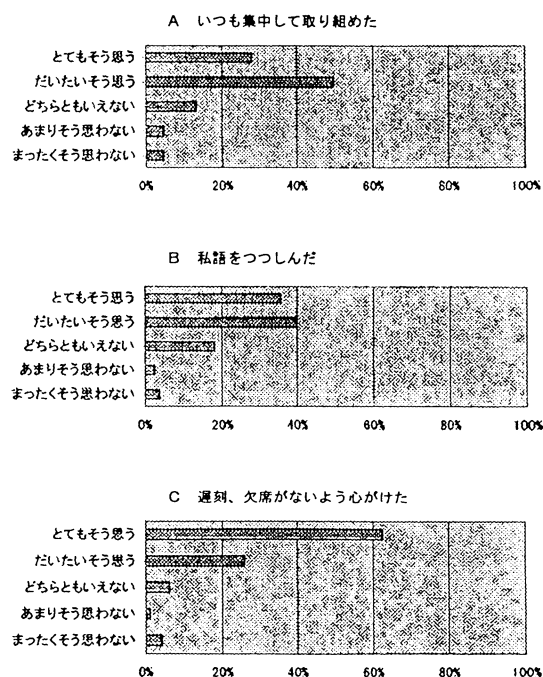
11の調査項目のうち、肯定的な判断にあたる「①とてもそう思う」、「②だいたいそう思う」の合計値は、「F 学習内容に興味や関心が持てた（66%）」を除いて、70%を超えていてその平均は76%となっている。そのうち、「①とてもそう思う」という回答だけでみると、平均は39%であるが、最高値を示した項目は「C 遅刻、欠席がな

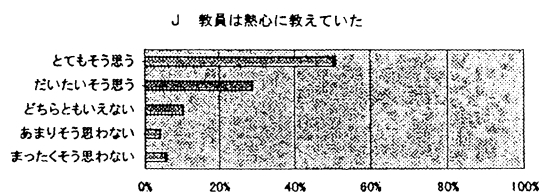
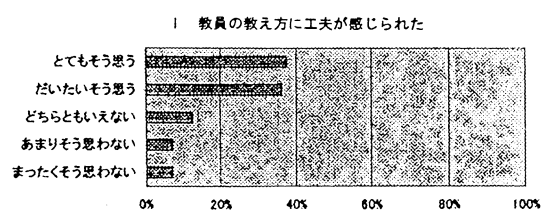
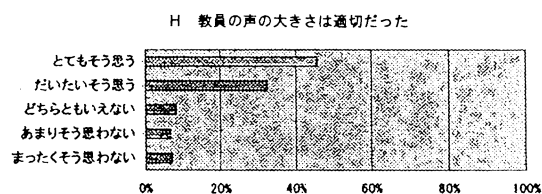
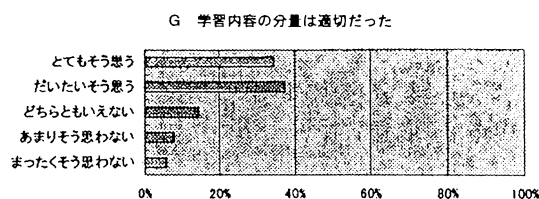
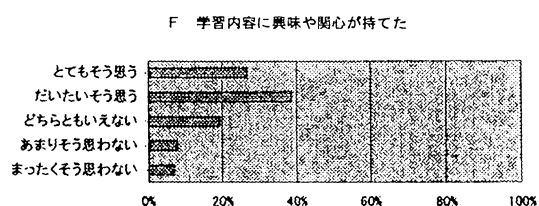
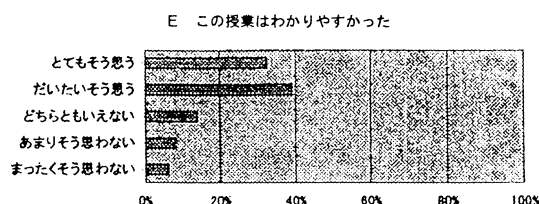
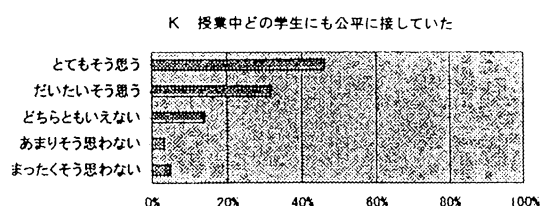
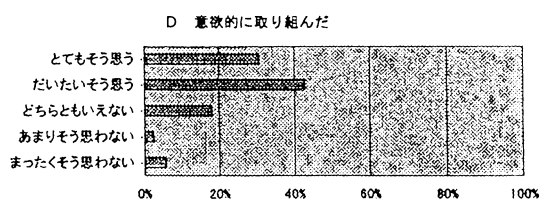
いよう心がけた」で63%であった。本学の学生の授業への積極的な取り組みの姿勢の現れと受け取れる。ただ1年生に比べると下がってきているのは多少気がかりである。教員の授業評価として①と②を合わせて最も高い評価であったのは「J 教員は熱心に教えていた」で、80%あった。学生の積極的な姿勢と教員の熱意とが、充実した学習を生み出す雰囲気を作っているといっている良いのではなかろうか。しかし、「F 学習内容に興味や関心が持てた」の項目の評価が①と②をあわせても66%であり、一方でこの項目は否定的な判断にあたる「④あまりそう思わない」、「⑤まったくそう思わない」は15%もあり、もっとも高い結果となっている。教員の今後の課題として残る。

一方、否定的な判断にあたる「④あまりそう思わない」、「⑤まったくそう思わない」では、前述の「F」以外でその数値が高い項目は「E この授業はわかりやすかった」「G 学習内容の分量は適切だった」「H 教員の声の大きさは適切だった」「I 教員の教え方に工夫が感じられた」で、各14%となっていて反省材料と考えられる。

また、こういう調査では「③どちらともいえない」の割合が多くなりがちであるが、平均すると20%を切っていてこの調査の信用性を増している。

表9





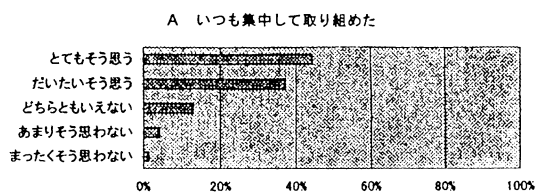
d 情報福祉コース（1年）

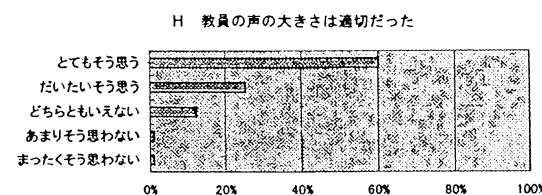
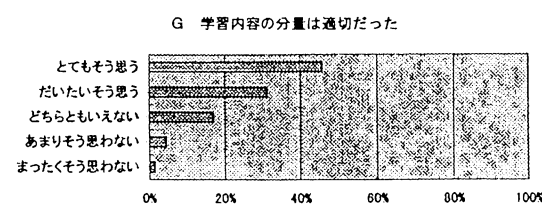
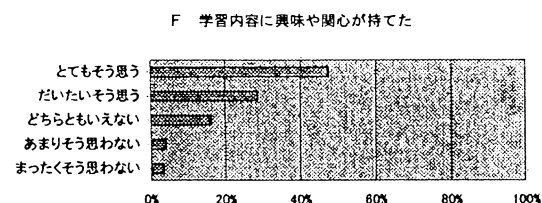
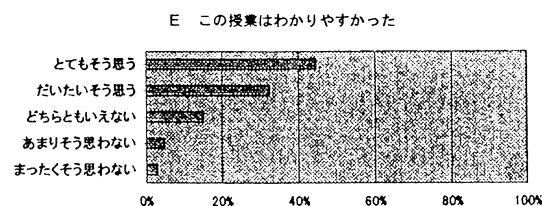
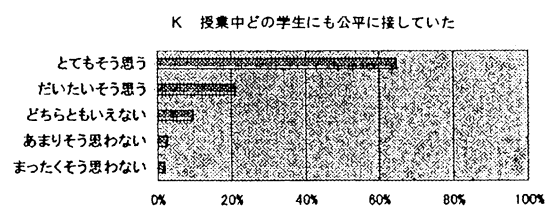
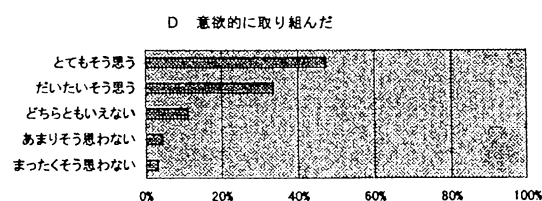
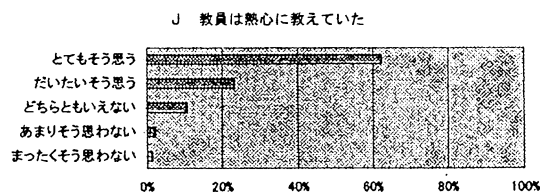
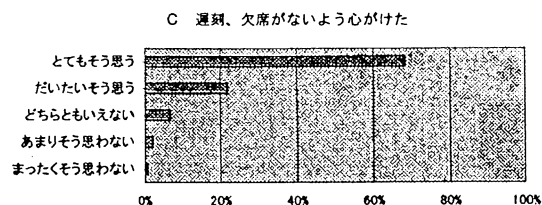
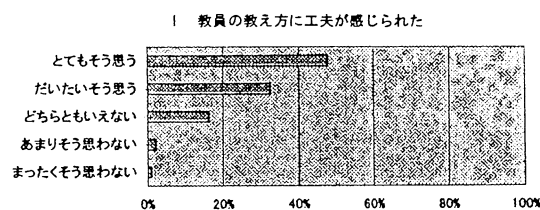
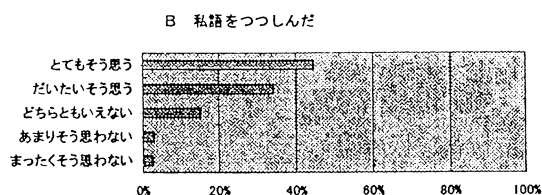
11の調査項目のうち、肯定的な判断にあたる「①とても思う」、「②だいたい思う」の合計値は全て75%を超えていてその平均は82%となっている。そのうち、「①とても思う」という回答だけでみると、全て40%を超え、最高値は示したのは68%の「C 遅刻、欠席がないよう心がけた」という項目であった。2年生も最高値をしめしたが、それに比べてみても5ポイント上回り新鮮な気持ちで大学の授業に期待をしている姿がうかがえる。また、①と②を合わせて最も高い評価であったのは同じく「C 遅刻、欠席がないよう心がけた（90%）」であったが、次に高い評価であったのは、学生の姿勢としては「A いつも集中して取り組めた（81%）」、「D 意欲的に取り組んだ（81%）」で、教員にかかわる項目では「H 教員の声の大きさは適切だった（85%）」「J 教員は熱心に教えていた（85%）」の各2項目である。

一方、否定的な判断にあたる「④あまりそう思わない」、「⑤まったくそう思わない」の合計値は最高で8%となっている。その項目は「E この授業はわかりやすかった」であり、教師の反省材料と考えられる。

また、2年生同様「③どちらともいえない」の割合は全て20%を切っていることは、この調査の結果の信頼性を高めるもので評価されてよい。

表10



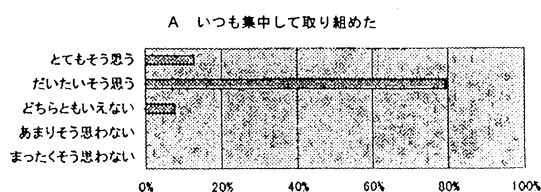


e 留学生コース（2年）

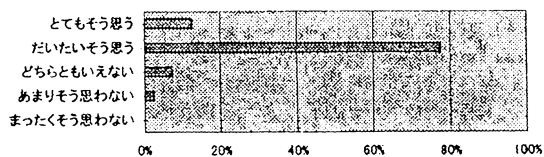
11の調査項目のうち、肯定的な判断にあたる「①とてもそう思う」、「②だいたいそう思う」の合計値は全て80%を超えていてその平均は88%となっている。自らの授業に取り組む姿勢も教員の授業内容もともにほぼ満足できている様子が感じられる。ただ、他の留学生コースと異なる点は「②だいたいそう思う」の比率が「①とてもそう思う」に比べて極端に高い結果になっている点で、多少満足度が低いのではないかという感じがする。その点については、分析の必要があろう。

一方で、否定的回答にあたる「④あまりそう思わない」、「⑤まったくそう思わない」が高い主な項目は「H 教員の声の大きさは適切だった（10%）」「F 学習内容に興味や関心が持てた（10%）」「C 遅刻、欠席がないよう心がけた（9%）」となっている。

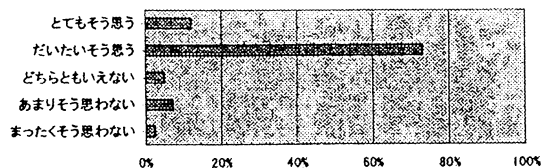
表11



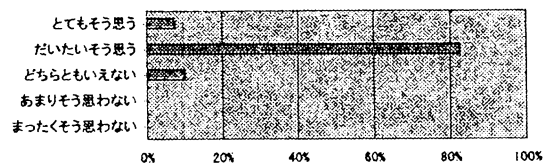
B 私語をつつしんだ



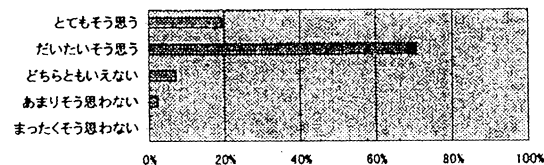
C 遅刻、欠席がないよう心がけた



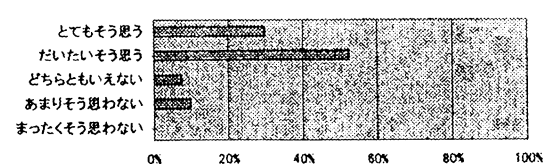
D 意欲的に取り組んだ



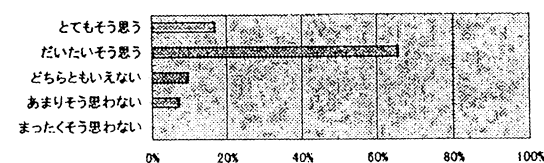
E この授業はわかりやすかった



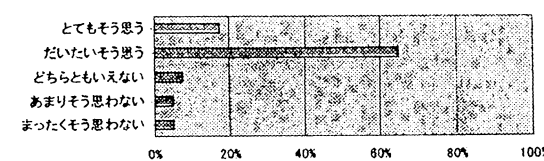
F 学習内容に興味や関心が持てた



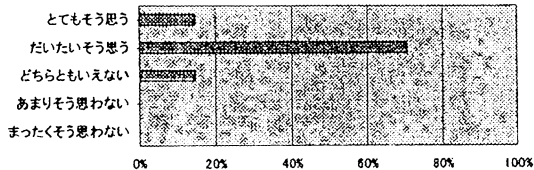
G 学習内容の分量は適切だった



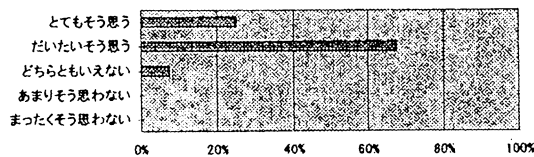
H 教員の声の大きさは適切だった



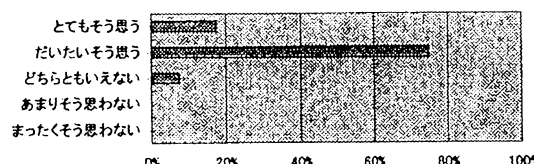
I 教員の教え方に工夫が感じられた



J 教員は熱心に教えていた



K 授業中どの学生にも公平に接していた



f 留学生コース（1年）

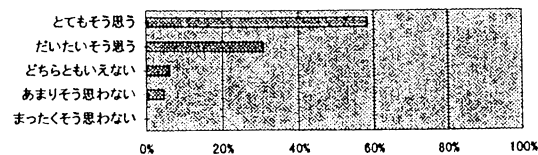
11の調査項目のうち、肯定的な判断にあたる「①とてもそう思う」、「②だいたいそう思う」の合計値は「G 学習内容の分量は適切だった(75%)」を除いて全て85%を超えていてその平均は87%となっている。「G」については負担が大きすぎるという内容であったが、例年と同じ教材を利用しているので、分析・検討が必要であろう。

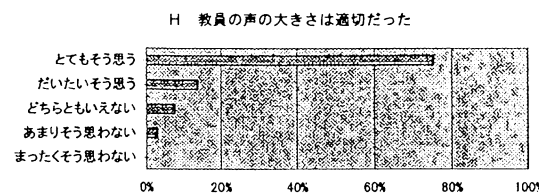
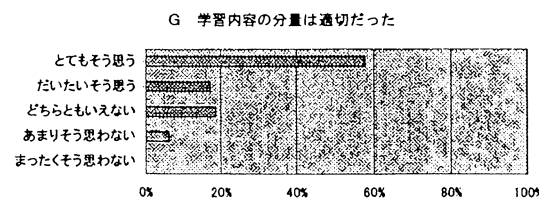
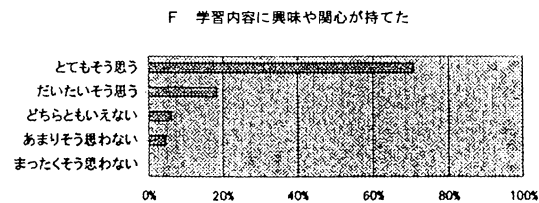
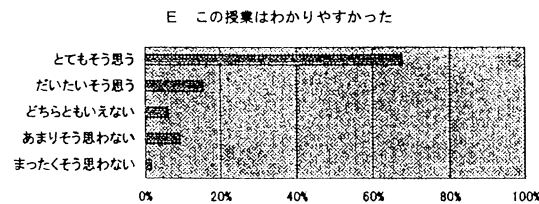
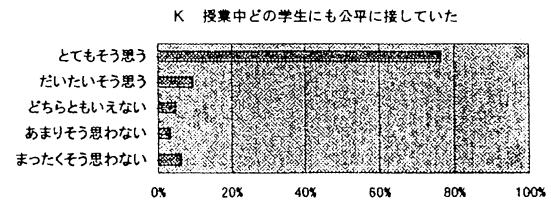
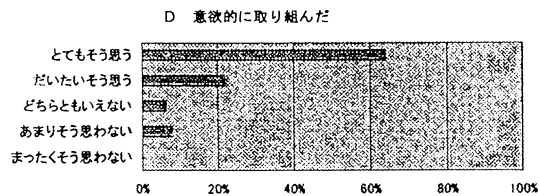
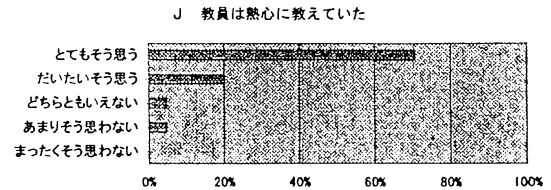
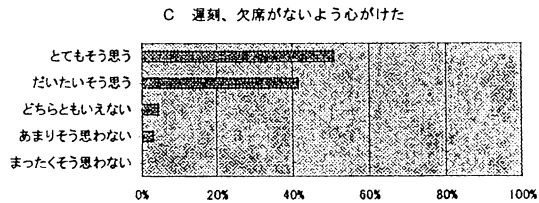
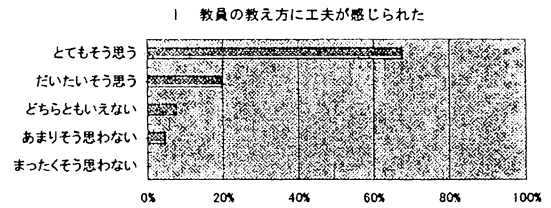
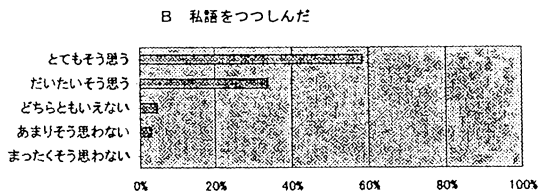
否定的回答にあたる「④あまりそう思わない」、「⑤まったくそう思わない」の主な項目は「E この授業はわかりやすかった(11%)」「K 授業中どの学生にも公平に接していた(9%)」「D 意欲的に取り組んだ(8%)」となっている。

留学生については全体としては常に高い評価が出るが、やはり学生の意欲と教員の熱意がそのような評価になると思われるが、細かく見ると年により学生の特徴が見受けられるのでそれに応じた対応が求められる。

表12

A いつも集中して取り組めた





幼児教育学科

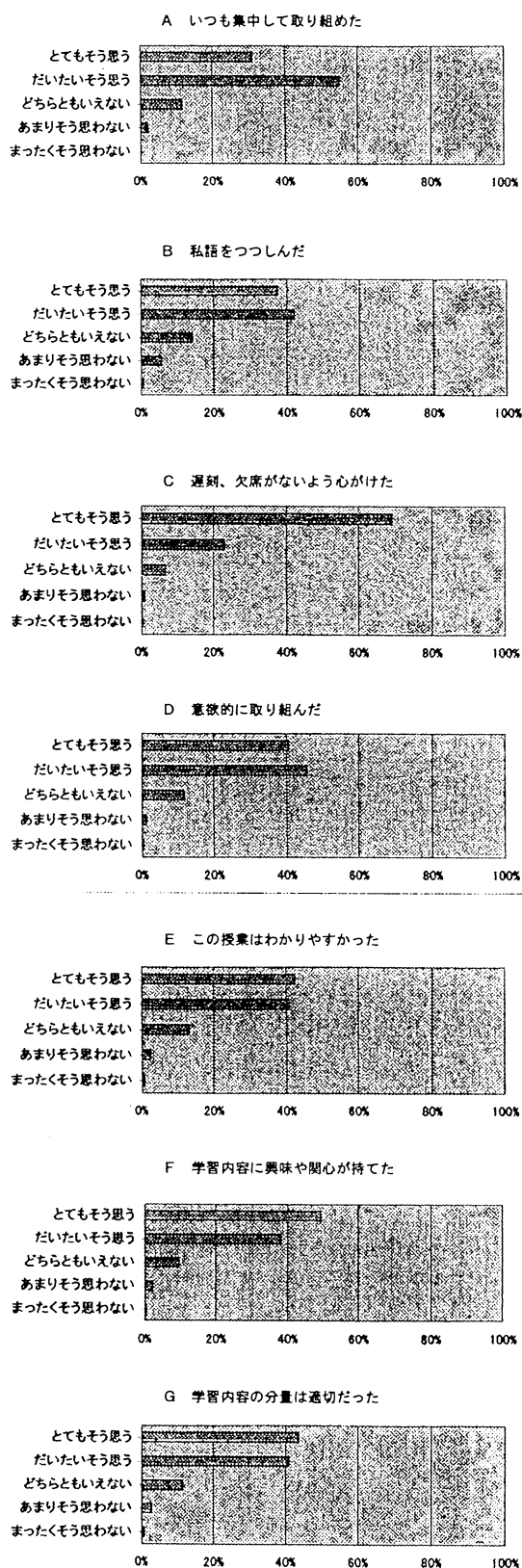
a 幼児教育学科（2年）

11の調査項目のうち、肯定的な判断にあたる「①とてもそう思う」、「②だいたいそう思う」の合計値は「B 私語をつつしんだ（79%）」を除いて、80%を超え「B」も含めた平均は87%と高い評価である。その中で最も高いのは学生の授業への取り組みの項目の「C 遅刻・欠席がないよう心がけた（92%）」と、教員の授業のあり方の項目の「J 教員は熱心に教えていた（92%）」であった。その他「K 授業中どの学生にも公平に接していた（90%）」「H 教員の声の大きさは適切だった（90%）」となっている。教員の熱意と学生の意欲とがうまくかみ合っていることが感じられる。

また、否定的な判断にあたる「④あまりそう思わない」、「⑤まったくそう思わない」の合計値も10%を超えた項目はなく、「B 私語をつつしんだ（7%）」が最も高い数値であった。

こういう調査では「③どちらともいえない」の割合が多くなりがちであるが、全項目15%を切っていて、しかも肯定的な①、②の判断に大きく偏り、④、⑤の数値の平均が3%を切っていることは評価されてよい。

表13



b 幼児教育学科（1年）

11の調査項目のうち、肯定的な判断にあたる「①とてもそう思う」、「②だいたいそう思う」の合計値が全て60%を超えている。しかし、全項目で2年生に比べて不満足の方へシフトされている。この点に関しては後期の結果を注目する必要があると考える。

全体としては満足度が高いことには違いはない。その中で最も高いのは学生の授業への取り組みの項目の「C 遅刻・欠席がないよう心がけた（91%）」と、教員の授業のあり方の項目の「K 授業中どの学生にも公平に接していた（82%）」「H 教員の声の大きさは適切だった（82%）」であった。その他「J 教員は熱心に教えていた（81%）」が高い数値を示している。

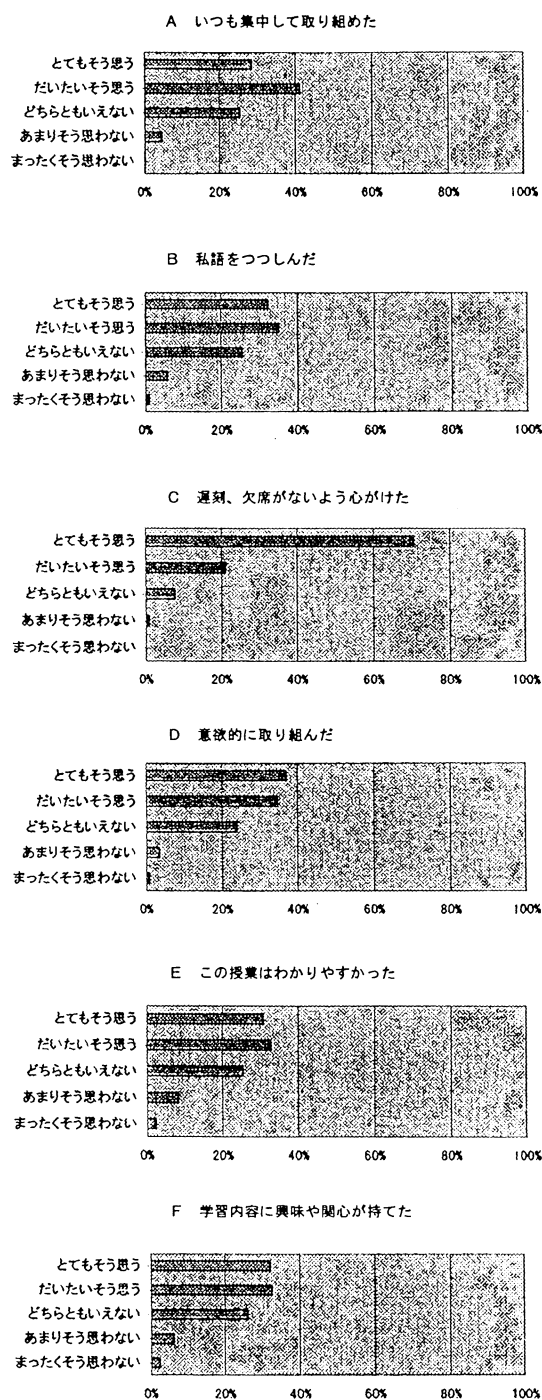
また、否定的な判断にあたる「④あまりそう思わない」、「⑤まったくそう思わない」の合計値も10%を超えた項目は「E この授業はわかりやすかった（10%）」だけであった。

ただ、平均すると「③どちらともいえない」の

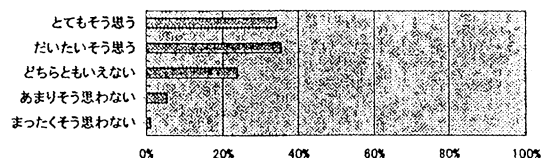
割合が20%程度あってその点でも同じ学科の2年生とは大きな違いを見せている。

総合的に学生の評価を分析してみると、遅刻、欠席をしないよう積極的に授業に取り組み、授業に集中することを心がけている。教員の課題としてはさらに「教え方を工夫」することで「わかりやすい」授業を心がけ「興味・関心」を持たせることであろう。

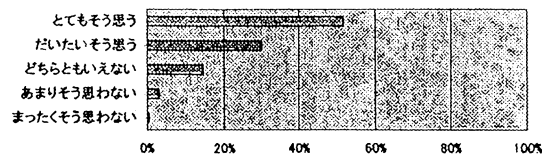
表14



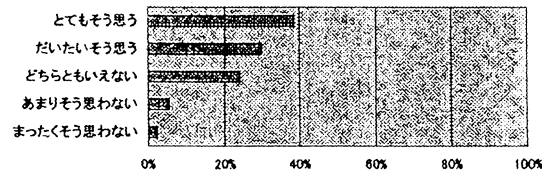
G 学習内容の分量は適切だった



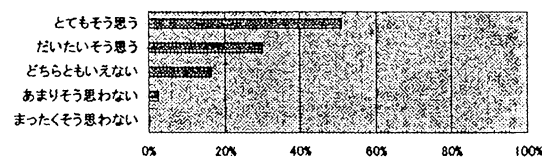
H 教員の声の大きさは適切だった



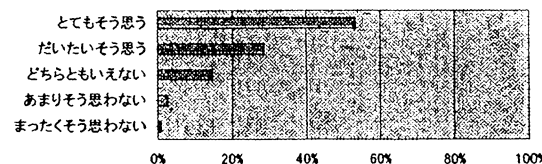
I 教員の教え方に工夫が感じられた



J 教員は熱心に教えていた



K 授業中どの学生にも公平に接していた



介護福祉学科

c 介護福祉学科（2年）

11の調査項目のうち、肯定的な判断にあたる「①とてもそう思う」、「②だいたいそう思う」の合計値で特に目につくことは、学生の取り組む姿勢の項目では「C 遅刻・欠席がないよう心がけた（98%）」と、教員の授業のあり方の項目で「J 教員は熱心に教えていた（73%）」とが、他の項目に比べて飛び抜けて高い数値になっていることである。それ以外はほとんど50%代であり、その平均は60%となっている。学生は授業に積極的に参加するものの「D 意欲的に取り組んだ」「A いつも集中して取り組めた」の項目がともに評価が①と②をあわせても57%であることは、今後の

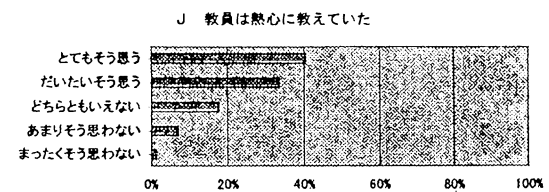
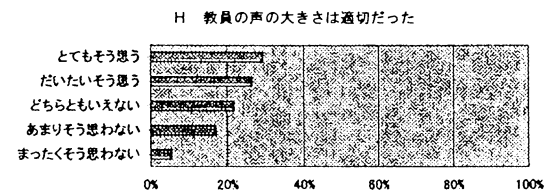
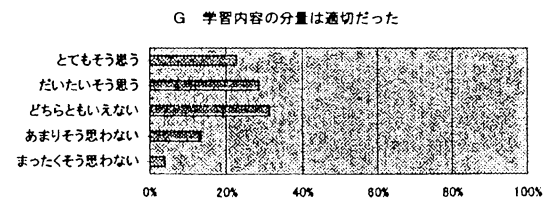
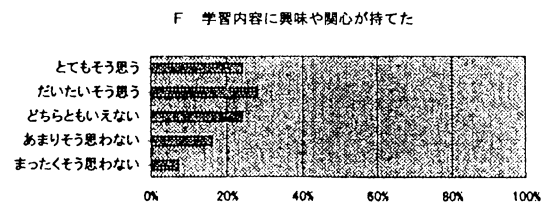
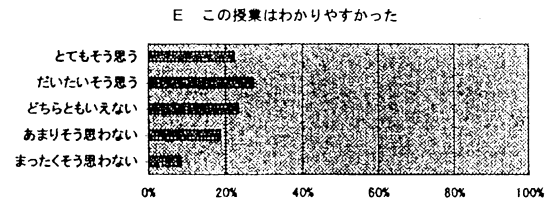
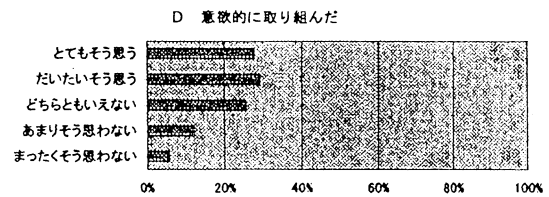
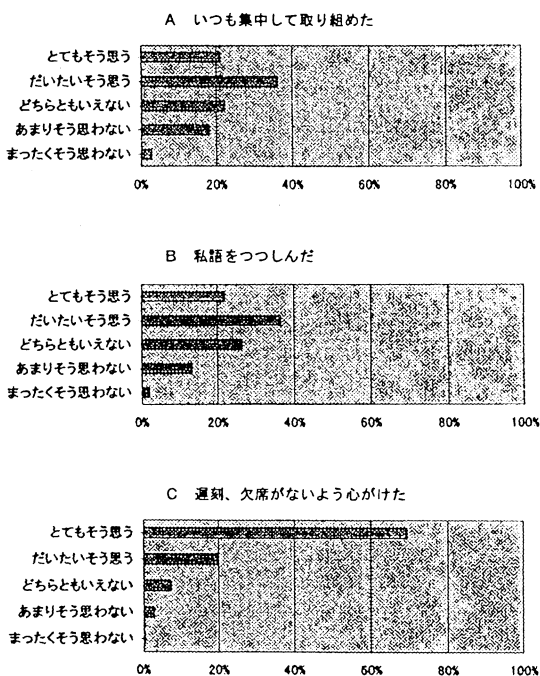
課題として残る。また、「E この授業はわかりやすかった」が49%であることも課題として残る。

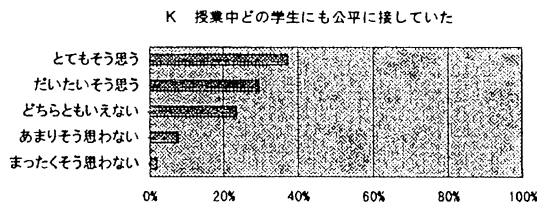
否定的な判断にあたる「④あまりそう思わない」、「⑤まったくそう思わない」の合計値の最高は27%で、その項目は「E この授業はわかりやすかった」であるが、それに次ぐ項目が「F 学習内容に興味や関心が持てた(23%)」である。その原因の一部は介護関係の専門教科は高校時代にはなじみが薄いため、抵抗があることも考えられる。しかし、専門の知識と技術を身につけさせることは必修であるので、教員の努力が求められている結果となっている。学生の姿勢としては「A

いつも集中して取り組めた」の項目が21%と高く今後改善が求められる。それに次ぐのが18%の「D 意欲的に取り組んだ」であって気になるところである。

総合的に学生の評価を分析してみると、遅刻、欠席をしないよう積極的に授業に取り組む姿勢はあるものの、授業に集中する面にやや欠け、つい私語をする点がうかがえる。教員側の反省項目としては、専門的な知識を持たない学生に対して、教え方を工夫することによってわかりやすい授業を行い、興味や関心を持たせるように心がけることが求められている。

表15





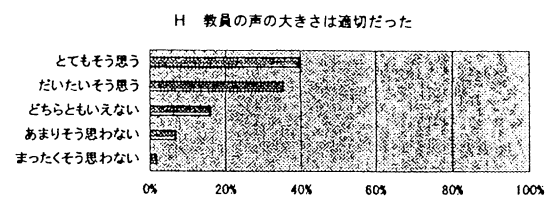
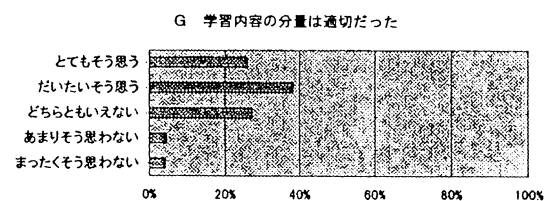
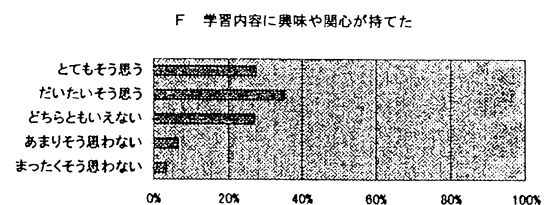
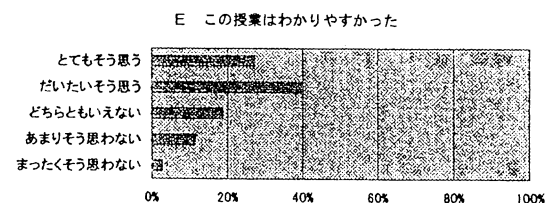
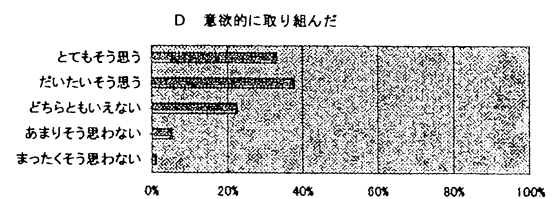
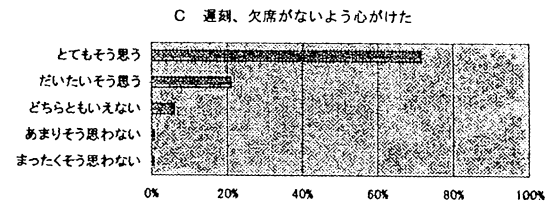
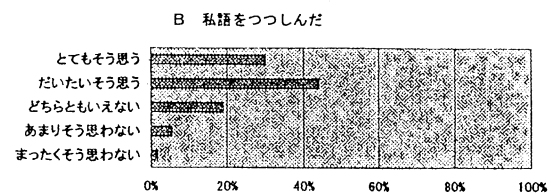
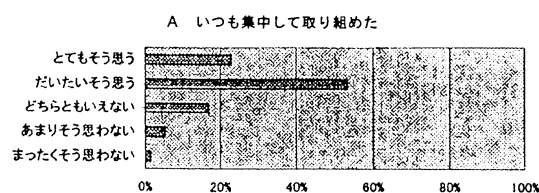
d 介護福祉学科（1年）

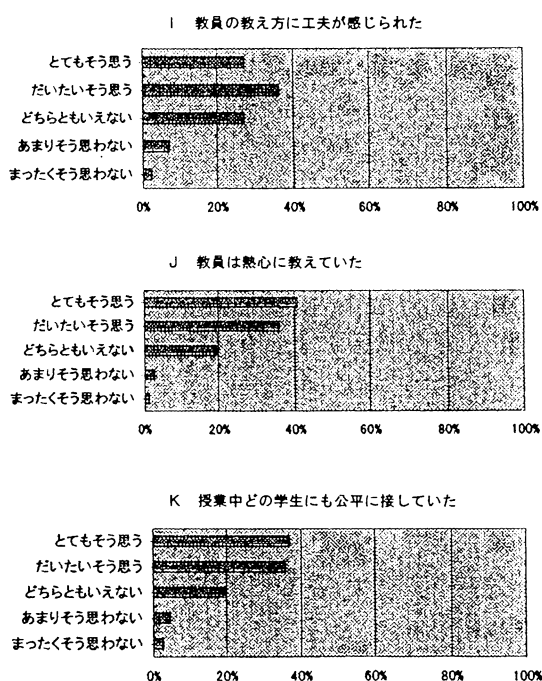
11の調査項目のうち、肯定的な判断にあたる「①とてもそう思う」、「②だいたいそう思う」の合計値は全て60%を超えて高い数値を示している。その平均は72%となっている。「C 遅刻、欠席がないよう心がけた」は93%で高い評価であった。教員の授業のあり方に関しての項目では「J 教員は熱心に教えていた（73%）」が高い結果となっている。次に高い評価であったのは、学生の姿勢としては「A いつも集中して取り組めた（76%）」、教員にかかわる項目としては「H 教員の声の大きさは適切だった（75%）」「K 授業中どの学生にも公平に接していた（73%）」であった。

しかし、一方で否定的な判断にあたる「④あまりそう思わない」、「⑤まったくそう思わない」の合計値の最高は14%で、その項目は「E この授業はわかりやすかった」であり、次いで11%の否定的意見として「F 学習内容に興味や関心が持てた」が挙げられており、教員の課題として取り組む必要があろう。

総合的に学生の評価を分析してみると、2年生と同じ傾向で、遅刻、欠席をしないよう積極的に授業に取り組む姿勢はあるものの、授業に集中する面にやや欠け、つい私語をする点がうかがえる。教員側の反省項目としては、専門的な知識を持たない学生に対して、教え方を工夫することによってわかりやすい授業を行い、興味や関心を持たせるように心がけることが求められている。

表16





6. 調査結果の傾向

項目別にみていくと、肯定的判断でもっとも高い評価が示された項目は、学生に関する項目では、「遅刻、欠席がないよう心がけた(88.5ポイントー4学科平均ー以下同)」である。一方、教員に関する項目では「教員は熱心に教えていた(82.0ポイント)」となっていて学生の積極的な姿勢と教員の熱意とがうまくかみ合った形になっている。続いて「授業中どの生徒にも公平に接していた(80.0ポイント)」が80ポイントを超えている。さらに、「教員の声の大きさは適切だった(78.7ポイント)」「いつも集中して聞けた(73.5ポイント)」「意欲的に取り組んだ(71.3ポイント)」「私語をつつしんだ(70.0ポイント)」の4項目が70ポイントを超えている。また、残り4項目についても最も低い評価が「この授業は分かりやすかった」の66.8ポイントであり、全ての項目がそれ以上の高い評価を得ているということに大きな意義を感じる。これまでの調査と比較しても、これほど平均して高い評価が出たことは前例がない。

しかし一方、否定的評価もやや高くなる傾向がある。当然一般的には否定的評価において高いポイントを示す項目は、肯定的評価で低いポイントであった項目である。否定的評価が高いポイントを示したものは「この授業は分かりやすかった(13.5ポイント)」「学習内容に興味や関心を持てた(12.0ポイン

ト)」で、この結果は真摯に受け止め、授業の改善工夫に真剣に取り組む必要がある。

また、全体的な傾向をみると、これまで比較的順調に肯定的判断の割合が伸び、否定的判断の割合が減少していたが、今回は前述のようにその傾向に変化が見られる。特に、否定的評価項目に注目してみたとき、11項目中8項目が10ポイントを超えている学科についてはその特性はさりながら、これからそれを解消する努力が求められる。

もちろん、評価が高いことが、ただ単に人気があることであっては授業評価の意義はない。高等教育として質の高い授業内容、高い技術の習得のためには厳しい指導が必要である。授業評価を意識して厳しい指導を避けるとすればそれは本末転倒である。質の高い授業の実施のために受ける一部の厳しい評価は覚悟しなければならない。しかし、学生にとってより分かり易い授業の工夫や教材の選択の余地があるならば、その努力を怠ってはならないと考える。特に、教員から見て不十分と感じたとしても、学生自身は自らの授業に臨む態度4項目全てについて70ポイント以上の高い評価を与え、積極的に授業にとり組もうとする意欲を見せていることから、それに教員は応えなければならない。

7. おわりに

年度を追うごとに肯定的な回答の比率が高くなってきていることは、この調査の趣旨が十分生かされ、Plan → Do → See がうまく機能していることを示すものであったが、今回は多少の変化が感じられる結果となった。また、学科間の格差の拡大傾向も気になるところである。教職員が授業担当者として、また生活指導者としてさらには人生の先達としての使命と責任に思いをいたし、学生・教職員の意識改革をさらに進め、地域に信頼される質の高い教育のできる学園として評価されてきた本学を、今後、いっそう高い評価が受けられるよう初心にかえて取り組みを進める必要性を痛感する。

終わりに調査に協力いただいた関係者に心からの感謝を申し上げるとともに、この活動の趣旨を生かし、より活性化された教育活動を全職員で目指していくことができれば幸いである。

平成17年度前期学生による授業評価

評価項目は次の11項目である。

- A いつも集中して取り組めた
- B 私語をつつしんだ
- C 遅刻・欠席がないよう心がけた
- D 意欲的に取り組んだ
- E この授業はわかりやすかった
- F 学習内容に興味や関心が持てた
- G 学習内容の分量は適切だった
- H 教員の声の大きさは適切だった
- I 教員の教え方に工夫が感じられた
- J 教員は熱心に教えていた
- K 授業中どの学生にも公平に接していた

評価は次の5段階である。

1 とても思う	肯定的評価
2 だいたい思う	
3 どちらともいえない	
4 あまり思わない	否定的評価
5 まったく思わない	

	1 + 2 [肯定的評価]					3					4 + 5 [否定的評価]				
	服飾	食物	幼教	介護	平均	服飾	食物	幼教	介護	平均	服飾	食物	幼教	介護	平均
A	74	76	77	67	73.5	18	17	20	19	18.5	8	7	4	13	8
B	65	76	72	66	70	25	18	21	23	21.5	9	7	7	11	8.5
C	83	88	92	91	88.5	14	8	7	7	9	3	3	1	3	2.5
D	70	72	78	65	71.3	22	20	19	24	19	8	7	4	11	9.7
E	68	68	72	59	66.8	17	20	21	21	19.7	14	12	8	20	13.5
F	69	69	74	58	67.5	16	21	20	26	20.5	14	11	7	16	12
G	71	72	76	58	69.2	18	20	19	29	21.8	11	7	5	13	9
H	85	79	85	66	78.7	10	14	12	19	13.8	6	7	2	15	7.5
I	73	69	76	60	69.5	19	22	19	27	21	9	9	6	14	9.5
J	84	82	86	76	82	12	14	12	19	13.7	4	5	2	6	4.3
K	82	82	86	70	80	13	13	12	21	15	5	4	3	8	5
平均	74.9	75.7	79.5	66.9	74.3	16.7	17.0	16.5	21.4	17.6	8.3	7.2	4.5	11.8	8.1

数字は%を示す